

## 学習の記録

ドイツ人の環境問題に対する意識、日常にある環境問題への取り組み

【氏名】 藤井 葵

ドイツ 4 位、日本 21 位、これは 2023 年の SDGs 達成度ランキングです。毎年順位を上げているドイツと比べ、日本は後退し続けています。日本でも SDGs という言葉は浸透しており、多くのことが取り組まれています。では、SDGs 先進国であるドイツとの差は何なのか。私はこの疑問を解決するために派遣期間中に、街での SDGs 浸透度や個人の取り組んでいる内容を調査してきました。



初めにドリンク容器のデポジット制度についてです。写真のこの機械はスーパーマーケットに設置してある回収機です。ドイツでは、ペットボトルや缶、瓶を購入する時に商品代とは別に容器の保証金を支払わなければなりません。ただ保証金は容器を返却すれば返金される仕組みとなっています。個人的に返却すれば割引になるよ、というやり方よりもプラスで支払ったお金が返ってくる方が損したくないから返そうという思考になり返却率が上がると感じました。回収の仕組みは、日本にも設置してあるものと似ているのですが、違うと感じた点が2つあります。

1つ目は、ペットボトルのラベルを取らないという点です。日本では飲み終わったペットボトルは本体、ラベル、キャップの3つに分け、それぞれ処分しますが、ドイツではラベルはつけたままです。機械にボトルを入れた時に商品のバーコードを読み取り、回収できるのか、保証金はいくらなのか判断するそうです。

2つ目は、保証金が現金で返ってくるところです。日本ではそれぞれのスーパーマーケットのポイントに変換という制度が多い中、ドイツでは現金にして渡してくれます。回収機から出てくるレシートをレジで渡すことでお金をいただけます。子供がお手伝いとして容器を返却し、代金をお小遣いとしてもらったり、スマートフォンの操作や複雑なポイント制度が難しく感じる高齢者などの方にも手軽に取り組める仕組みだと教えてもらいました。



次の取り組みはゴミ処理についてです。

街中にある共有コンテナや服のリサイクルボックスにも連れていってもらいました。この写真は共有コンテナで近所に住んでる人が利用するボックスです。この写真は瓶を捨てるボックスになっており、ボックスの色と同じ色の瓶を捨てるものになっています。先ほどのスーパーマーケットでの回収機に入れてはいけない瓶もあるのでそれらの瓶はこのボックスに捨てます。



次の写真は古着回収ボックスです。それぞれのボックスの違いは寄付する場所です。右の緑ものは『テクスエイド』というスイス初の古着のリサイクルを行う会社です。他にもドイツの赤十字など自分が支援したいと思うボックスに古着を寄付することができます。街中で手軽に服を手放し、そして誰かに寄付できる一石二鳥のシステムだと感じました。

ホストファミリーと過ごす中でも環境保護に対する意識の高さを感じました。紙ナプキンは一回ではなく2回使ってから捨てる、ドリンクなどは冷蔵庫ではなく地下で保存する。など日常に少し工夫を足した取り組みがありました。

また、私は行く前にマイバック、マイボトルに続くマイ何かを見つけたい、今のところはマイストローだと思っていました。そこで、環境に配慮されたお店で質問をしてみました。そこで聞いた話がすごく記憶に残っています。それは、ストローは必要なのか。というものです。確かにストローがなくても飲むことができるし私の場合、家ではストローを使うことがありません。プラスチックを使用しているから、代替え品を探して使用しようというだけでなく、それはないといけないのか、本当に使う必要があるのかと一回考えることが大切だと気付かされました。

気候が異なり全く同じことをできるわけではないですが、日本にいても取り組めることがあります。大事なことは苦がなく日常に溶け込むようなことを地道に続けることだとホストマザーに教えてもらいました。自分が手軽に出来ることをたくさん積み重ね環境を守っていきたいと思います。

## 学習の記録

### 日本とドイツのSDGsへの取り組みの違い

【氏名】 金田 千紘

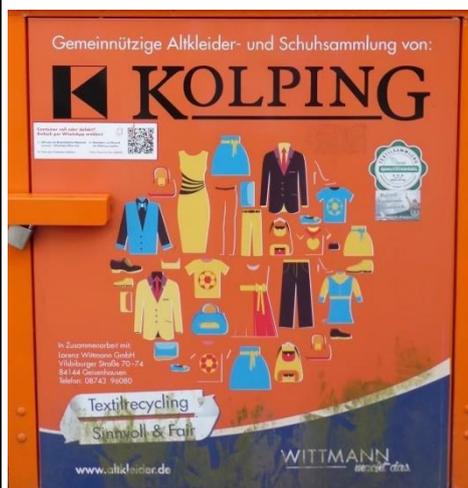
2023年のSDGsの達成度は日本は21位、ドイツは4位という結果でした。ドイツは環境先進国として知られ、環境問題に対する意識が非常に高いです。SDGsの中でも環境問題に焦点を当て、具体的に行われている取り組みや実際の生活で感じたことを紹介します。



ホストファミリーの家から集合場所のマリエンプラッツに行く途中に、Kolpingのリサイクルボックスを見つけました。Kolpingはカトリック教会と結びついた社会奉仕団体が、環境保護や社会支援活動を目的に設置されています。主に古着や靴、カーテンやシーツなどの布製品を回収しており、回収されたものはKolpingが運営する施設で仕分けされます。再利用可能なものは低価格で販売され、貧困者や支援が必要な方には無料で提供されることもあるそうです。再利用不可能なものは適切に処分または他のリサイクル方法に回されます。販売で得た収益は、貧困層への支援、難民やホームレスの支援活動など様々な社会活動に使用されています。



日本では、スーパーや学校などの公共施設にリサイクルボックスが設置されていますが、ヴォルフラーツハウゼン市で見つけたリサイクルボックスはそれらに加えて住宅地や公園などにも設置されていました。誰もが便利に利用できるアクセスしやすい場所に設置されることで、リサイクルへの意識が高まると感じました。このリサイクルボックスは環境保護を目的だけでなく、さまざまな社会活動に貢献していることが分かりました。支援が必要な方々にも手を差し伸べることができるという点で、非常に価値のある取り組みだと思います。



ドイツでの一週間の生活を通して、リサイクルをすることも大事ですが、資源を無駄にせずごみを出さないことも重要だと感じました。例えば、日本ではボックスティッシュが一般的であり、多くの家庭で使用されています。家庭によって異なるかもしれませんが、私のホストファミリーの家ではティッシュを使用する機会がありません

でした。食事の際には紙ナプキンが一枚用意され、口元や手が汚れたときはその一枚で対応していました。また、日本ではトイレにペーパータオルが設置されていますが、ドイツではロールタオルまたはハンドドライヤーが置かれていることが多かったです。ロールタオルは必要な分だけ引き出せる仕組みとなっており、使用したら自動的に次の部分が供給されるため、ペーパータオルよりも資源を減らす設計になっています。ティッシュはとても便利ですが、ごみを増やす原因でもあります。私たちにできることは、使用頻度を減らすということです。また、ドイツでは使い捨てのプラスチックストローやカトラリー、カップなどの生産が禁止されているという話を聞きました。日本でもプラスチックから紙の製品に切り替える動きが見られますが、まだまだプラスチック製品の利用率は高いです。紙ストローの利用やマイバックを持ち歩くなどの一人ひとりの意識が非常に重要であると感じました。

## 学習の記録

ドイツ人の環境の価値観や考え方

【氏名】 近藤 壮輔



①ミュンヘン市が市内の車両の速度制限 30km/h の区間を拡大した

これは、一般論的に考えると、「近くに学校ができた」や、「道路工事中だから(実際にミュンヘン市内は道路工事ばかりでした)」という結論になるかもしれません。自分自身も、道自体が特段広いわけではないですが、片側 2 車線の道でそのような光景を見かけたとき、「工事中だから」と軽く済ませていました。しかし、後にホストファーザーが、「この道は今年から、環境への負荷を減らすために制限速度が 30km/h になった」と言われ、とても感激しました。言われてみると、自動車が速度をあまり出さなければそれに従って燃料の消費量が減るのは確かなことです。自分の中には無い視点で、とても新しさを感じました。それに伴い、騒音は軽減され、交通の安全性も増し、一石二鳥、ましてや一石三鳥にもなると思いました。探してみるとさらにその有効性が見えてくるかも知れません。



②ドイツの電気自動車への優遇が段違い

ドイツでは、電気自動車への金銭面での優遇措置があるとホストマザーから聞きました。詳しく調べた結果、(i)100%電気自動車(内燃機関なし・完全に電気のみをエネルギーとして使う車)の自動車税が 10 年間免除を 2016 年より開始したり、(ii)それらの車両購入時に最大 75 万円を補助金として交付したりしています。また、(iii)政府は 9 億ユーロ(=1440 億円、1 ユーロ 160 円で計算)をかけ、EV を保有する一般住宅への充電器・太陽光発電システム・蓄電設備の導入支援、企業への急速充電施設の導入支援をすすめています。(i)や(ii)の効果は、2019 年では完全電気自動車の普及率は約 3%でしたが、2020 年には 13%、2021 年には 26%、2022 年には 31%と急激な上がり幅になっています。



同年の日本のデータと比較すると、日本の電気自動車の普及率は 1.85%となっています。数字が、ドイツと日本との政策などでの大きな懸隔を体現しているといっても過言ではないでしょう。

やはり日本でも欧州に倣いこのような取り組みをするべきです！なんて言ってもこのご時世の財政逼迫ではできません。どうしましょう。それは、「行政」のみ、「消費者(国民)」のみ、ではなく行政と消費者の両方にメリットが均等にあるような政策を取らなければなりません。でもまだそれも不可能に近いです。今は消費者が環境にできるだけ負荷をかけないような消費行動をすることが必要だと考えます。



### ③「パック」の削減

ソーセージなどのパッケージが簡略化されていたり、日本では見られない、買い物時商品棚から取った商品をそのままマイバッグに入れる光景を目にしました。これも、プラスチック製のカゴを減らすためだそうで、とても新鮮でした。

## 学習の記録

### 日本と違った街並みと歴史と文化

【氏名】 篠崎 快



私はドイツに行った1日目から日本との生活、文化、建物が違うことを確認できました。私がホームステイした家はとてもカラフルな外装であり周りの家もカラフルであったことが印象に残りました。日本ではカラフルな家や建物をあまり見ることがなく、日本ではシンプルで統一感のある家を好む傾向から控えめな色の家がたくさんあると感じました。ドイツではカラフルな色を好む人が多いためこのような家がたくさんあるのではないかと考えました。ドイツでは夏の日照時間が長くサマータイムが導入されているためカラフルな家であることで明るい光の下で映え、明るい印象をもたらすからではないかとも考えました。

ヴォルフラーツハウゼン市役所のデザインは街並みと調和しており、入間市役所のデザインはシンプルで機能的な造りをしています。さらに、ミュンヘン新市庁舎では都市の歴史を表す建築であり観光地化しておりたくさんの観光客が訪れています。日本では災害が多く、特に地震に対する耐震性の強い建物を作る必要がありますがドイツでは地震がほとんどなく耐震性のある建物を必要としないため様々なデザイン重視であったり、古い建物が今世まで残りやすいという点で優れていると感じました。

次に感じた違いは食文化の違いです。ドイツでは白ごはんをほとんど食べることがなく、主食がパンでした。それに加えてご飯の量が多いということも驚きでした。1日目の歓迎会では、同じ時間に同じ料理を提供されたがホストファミリーが私の半分の時間で完食していたことが日本や日本人との違いを感じることができました。



次に、歴史や文化です。私たちが見学したリンダーホーフ城では西洋の建築でありバイエルンの王様ルートヴィヒ2世の建造物です。ドイツのお城は平和な時代の象徴を表しており王様の趣味であったり、庭だけでなくお城の内部まで非常に華麗で装飾的でした。

一方、日本の城は和風の建築であり戦国時代や江戸時代に築かれたものが多く、軍事的な要素が強いです。石垣であったり堀を作り防衛のための構造である。日本の城の内部は、機関性が重視されています。ドイツのお城は平和を表しているため、ドイツの王様の趣味、芸術を表現しているということを学びました。ドイツでは貴族

によって発展していったため、このような文化が生まれたことを知れました。今回、ドイツと日本の異なる街並みや文化、歴史について学習したが、実際にドイツに行ってみて感じた違いや興味深い事がたくさんあったのでもっとこのテーマについて深めていきたいと感じました。

## 学習の記録

### ドイツの歴史的建物について

【氏名】 金子 柚良

今回のドイツへの訪問での目的は、ドイツの歴史的な建物や日本庭園を見ること、そして日本とドイツの建物の違いについて見て学ぶことでした。実際にドイツの教会やお城を見て、このような建物が何百年も前から存在していることにとっても驚きました。今回は、日本とドイツの建物の違いと、ドイツの歴史的建造物について私が思ったことを紹介したいと思います。



【日本とドイツの建物の異なる魅力は、】

日本の城:

- ・日本の城は様々な石を積み上げて作られた城壁や権力を表す天守閣などが印象的。
- ・主に木材を使用して建てられている。

ドイツの城:

- ・ドイツのリンダーホーフ城やエタール修道院は石垣などはないですが、金箔で装飾された天井や壁、豪華なシャンデリア、精緻な彫刻などが多く見受けられた。
- ・ドイツの建物は石造で、厚い石の壁が特徴的。

どちらの国の建物もとても魅力があります。ドイツに行ってみて、普段は写真でしか見ることができなかった建物を実際に自分の目で見ることで迫力の凄さを改めて実感しました。





### 【ドイツの歴史的建造物】

ミュンヘン新市庁舎では、ドイツ最大の仕掛け時計を見ることができました。建物の先端の尖っている部分や細かい装飾、高さ100メートルに及ぶように、ドイツの歴史的な建物でよく見られるネオゴシック様式の特徴を見ることができました。

夏は11時、12時、17時の3回のみ仕掛け時計から等身サイズの32体の人形が10分間動き出します。この仕掛け時計が1908年以降、止まることなく動いていると考えるととても感動しました。



### 【ドイツの街並みの中にある日本庭園】

日本とは違う街並みの中に日本庭園があり、不思議さと同時に懐かしさを感じました。そこには家族連れやカップルなど多くのドイツの方がいて、日本庭園の良さが伝わっているような気持ちになり感動しました。



今回、日本とドイツの歴史的な建物の違いや、ドイツの伝統的な様式を見ることができとても嬉しかったです。本や写真でしかみることができなかったものを、ドイツに行き、実際に自分の目で見て体験することが一番勉強になり、人生の素晴らしい経験に繋がると強く思いました。ドイツについて今まで以上に興味を持つことができました。

## 学習の記録

### ナチス時代の負の遺産を知ること

【氏名】 湯浅 凛花

私は大学で音楽学を専攻し、音楽と社会や政治との関わり合いに関心を持っています。卒業研究では、ナチス政権下で音楽がプロパガンダとしてどのように悪用されたのかをテーマに取り組む予定をしています。そのため、今回ドイツに派遣していただきテーマを設定し学びを深める上で、実際に強制収容所跡に足を運ぶことは必然のように感じました。

しかし、ホストファミリーとの大切な1日を使って行きたいと伝えることには、躊躇がありました。「行きたい」と言うことが適切なのか、またその意図を誤解なく伝えられるか、不安だったからです。それでも、丁寧に思いを伝えたところ、ホストマザーは優しく受けとめてくれました。「1人で行くのは怖かったからありがとう」と伝えると、ぎゅっと抱きしめてくれました。娘のヘレン自身も学校の社会科見学で二度訪れた経験があり、ドイツの徹底した歴史教育について話してくれました。自国の加害の歴史に正面から向き合い、二度と繰り返さないという決意を教育に反映させている姿勢に、はっとさせられました。私は、日本がしてしまったことを全て知っているのだろうか、知らずに誰かを傷つけてしまったことがあるのではないか、、、。日本では第二次世界大戦を語る際、被害者としての側面に重点が置かれる傾向があると感じ、少し怖くもなりました。



訪れたダッハウ強制収容所跡は、ミュンヘンの北西に位置する静かな町にあります。1933年、ナチスがここにドイツ初の強制収容所を設置し、多くのユダヤ人や反ナチスのドイツ人、ポーランド人が収容されました。囚人の数は188,000人を超えたと言われていますが、その正確な数は把握することができません。日本語での音声ガイドが完備されており、丁寧に学ぶことができました。

収容所内を歩くと、写真や拷問の描写、監視塔などが目に入り、その非人道的な実態に足がすくむ思いでした。復元されたバラックの狭さやその数を目の当たりにし、これほど多くの人々がこの地に押し込められていた事実という言葉を失いました。火葬場にはどうしても足を踏み入れることができませんでした。囚人たちが無理やり歌わされた音楽に関する展示もありました。音楽は日常生活やアイデンティティと深く結びついたものです。それを利用して人々を支配しようとした事実、胸がつぶれる思いがしました。

また、敷地内には教会がありました。キリスト教、ユダヤ教、それぞれの宗教の教会が並ぶ中で、壁が取り払われたシンプルな教会がありました。異な



る宗教間の和解を象徴するこの教会に、宗教が持つ大きな影響力とその難しさを痛感させられました。

様々な価値観や特性を持っている人達が、互いの存在を尊重し合いながら生きていく社会をどうやったら作ることができるのでしょうか。文化が違っていると違うところがたくさんあります。でも、一方で、同じところもたくさんあります。笑うこと、嬉しく思うこと、別れを寂しく思うこと、誰かを大切に思うこと。その感情は言葉が違ってても簡単に読み取れます。繋がることができます。この短いホームステイの期間でも、私は何回も「繋がった」と思える経験をしました。ひとは、自分と違うところに目を向けてそれを「怖いこと」として捉えがちですが、いかに面白いと思えるか、そして同じところにも目を向けられるかが大事なのではないかと思いました。

知っていることと、強制収容所跡で実際に見聞きしたこととは、その重さが全く違いました。感じた思いを絶対に忘れず、自分ができることを問い続けていきたいです。多様な価値観に目を向け理解し、日本のこと、自分のことを客観的に振り返ることができる人になりたいと強く感じました。

## 学習の記録

### ドイツの教育について

【氏名】 舘越 彩香

#### ○ドイツの学校制度について

ドイツでは 10 歳で将来の分かれ道となる大きな選択をします。6～15 歳までを義務教育として過ごし、10 歳までは基礎学校に通い初等教育を受けます。その後、大学進学を目指す人は 5 年生に編入という形で学業を継続し、働くために専門的な知識を身につけたい人は 15 歳までを基幹学校や実科学校で学びます。日本では高校 3 年生の 18 歳の時に進路を決定することが一般的なため将来について考える年齢の違いに驚きました。

また、大学の制度についても日本との違いを見つけました。ドイツの大学はほとんど学費がかかりません。学生の生活費に関しても保護者の年収により政府から支援金が補助されます。ドイツ人だけでなく留学生に対しても学費無償、ドイツ国内の交通費の補助があり学生が非常に生活しやすいと思いました。ホストファミリーの話によるとドイツ人は子供たちにきちんとした教育の場を提供するという考えが根付いており、義務教育の際に教育の大切さを学んだと言っていました。とても素晴らしい制度だと感じた一方でドイツは賃金に対する租税が高い国の一つであり、国税庁のサイトによると世界で 14 番目に税金が高い国とされています。

以上の点からドイツの教育制度について私が感じたことは、早い段階から将来について考え準備をすることができる、という利点がある一方でわずか 10 歳というあまり社会を知らない状態で一生のことを決めてしまっても良いものなのか、また働く際に高すぎる税金が負担になってしまうのではないか、というマイナスの面も学ぶことができました。



#### ○ドイツの学童について

今回の訪問で小学 3～4 年生の子どもたちが通う学童を訪れました。ドイツの学校は 12 時に終わるため多くの生徒たちが 13 時頃から学童でお昼ご飯を食べ 15～16 時に保護者が迎えに来るまでを学童で過ごします。

ドイツの学童は個人事業主や企業が州や市と連携することで運営しています。年齢により通う施設が変わり、通う施設を選ぶのは市や町が行い、子供の怪我や病気での迎えに備え保護者の職場から近い施設を選ぶ場合があるそうです。保護者が学童に収めるお金は月約 4 万円で他は税金の補助により成り立っています。



学ぶ内容は自然に触れたり、ものを作ったりと様々で私はここで初めて土から生えているカブを見ました。カブをお店で売られている状態でしか知らなかったのですが実際に育てている現場を見ることで、土から少し出た状態でカブの食べる部分が育つことや茎が身の部分からも生えること、根の部分を食べる根菜だと思っていたカブが実は胚軸という茎の部分を食べているということを知りました。机の上で学ぶだけでは得られない体験することの大切さを感じました。

ドイツの学童は学校と同じくらいの時間を過ごすため学校の学びと学童の学びが同等の比重で力を入れていると感じました。





### ○Jugendhaus La Vida

ここは学校の校庭にある子供たちが自由に過ごせる場所です。親と喧嘩をした子供が逃げるシェルターであり、履歴書を書く手伝いや友達と遊ぶ場や、アルバイトをする場所でもあります。

建物を作るためにバイエルン州が補助金を出しヴォルフラーツハウゼン市と周りの自治体が共同で職員や施設のお金を出して作られました。市長がどの程度のお金を子供にかけるか決めるため市によって施設が違いますがドイツ全土に似たような施設があります。

日本同様核家族化が進む中で今までは祖父母が担ってきた親に怒られた際に子供の味方をする立場がこの施設なのではないか、と感じ子供に寄り添った考え方がとても良いと思いました。